

2016年



青空通信 グリーンライフ

2016・10・25

(花房弘明)

835号

山小屋に泊まると多くの人たちとの出会いがある。かつて冬の滝谷の岩場でブリザードの中、吊り下げテント内で5日間過ごしたという猛者から、「この山初めてなんです…」と言う人までいろんな人が集まる。そして、それらの人たちと枕を並べて聞いた夜話のいくつかは、妙に頭の隅から離れない。それは10年前、北アルプス・剣沢小屋でのこと。九州の宮崎から飛行機で富山まで来たというKさんは、念願だった剣岳に明日登ると意気込んでいた。剣岳への想いを一通り語った後、彼は地元宮崎にスゴイ山があると話し出した。「その山は、大きく崩れると書いて大崩山（おおくえやま）と言うとですよ。大岩ゴロゴロの深い渓谷と急崖な岩峰群は見事で、九州の百名山である祖母山や九重山より良か山ですが、深田久弥さんは大崩山に登っとらんですから、日本百名山には入っとらんですよ」とのことだった。深田久弥さんは、自らの登山経験から「日本百名山」を選定した人で、それが今日の日本名山の基準になっているわけだが、その深田さんは大崩山に登ったことがないので、名山にもかかわらず百名山から外れている、とKさんは語気を強めた。それ以来、ちょっと変わったこの山の名前は私の脳裏から離れず、いつか登らねば・・・と思っていた。かくして5月20日からの週末、仕事の段取りもつき天気も良いのでいざ出陣。Kさんが言うのがホントかどうか、三山を登らないと比較できないので、1日目は大崩山（1643m）、2日目は祖母山（1756m）、3日目は九重山（1792m）の三連ちゃん。ほんとうは、間に1日くらい休日を入れ温泉でも浸かりたいところだが、月曜日の朝には仕事場に居なければならぬ、ここが現職のつらいところだ。

5月20日（金）:

前日、ハイエース（配達的車）を駈り、8時間かけて宮崎入りし、登山口の林道で車中泊。朝4時過ぎ起床。コーヒーを飲みながらストレッチを終え、5時30分に登山始める。とてつもない大岩がゴロゴロ転がる祝子川渓谷の左岸をひたすら登る。坊主コースの標識は目にするも、お目当ての湧塚コースの標識を見逃す。あるはずの大崩山荘も目にしなかった。不思議だ。標識のあるべき分岐からすでに30分ほど歩いてしまっている。さてどうするか。分岐まで戻るとなると、それでなくともこの日の行程は10時間、そこに道迷いの時間が加わるとちょっとヤバイ。かといってまっすぐ進み、吐野経由のモチダ谷コースをたどることになると、予定よりかなり長い行程となる。どちらを取るかだ。結局、行程は長いがすっきり歩いた、と後で思えるモチダ谷コースをとった。しかし、この後もすんなりとはいかない。溪流に沿って遡上するが赤リボンや河原に岩の上に積んであるはずのケルン（石積み）といった目印がない。地図とにらめっこするも、とにかく目印が無い無い尽くしなのだ。ただ、低山の気楽さと崖に行き止まるといったことがないので地理感を頼りに右往左往しながらも山頂にたどり着いた。山頂付近には、時期遅れのアケボノツツジがまだしっかりときれいに花を付けており、気持ちが和む。

(1)

すぐに踵を返して下山。登る途中に、坊主コースと小積みコースの標識を見ていたが、来た道、湧塚コースを歩いているうちにいつの間にか坊主コースに入っていた。そのまま歩を進めると、左手に湧塚コースの岩峰群が目飛び込んできた。これら花崗岩の巨大な岩峰群がこの山のウリだ。いや道迷いもうりか？ ここからは大岩の間をくぐりながらの、ハシゴ・ロープ・ワイヤーの連続だ。歩くというより、垂直に下っていく感じだ。ワイヤやロープをつかみ損ねたら、かなりの距離を滑落することになる。急坂を下るにつれ、谷の沢水音が聞こえてきた。その沢を下ると祝子谷に出合う。渡渉して対岸を登ると、見覚えのある往路に出た。30分ほど下ると、林道に駐車していた愛車が目に飛び込んできた。登山口に戻ってきたのだ。約8時間の歩きだったが、道迷いが多かっただけに疲れた。また、一人の登山者とも出会わなかったのも意外だった。ちょっと不安を感じた山歩きだった。車で10分ほど下ったところにある美人湯にて汗を流した後、明日の山・祖母山登山口に向かう。山中の原っぱにて車中泊。

#### 5月21日(土):

朝4時過ぎに起床、この日は尾平登山口から黒金尾根に取り付く。この尾根は標高差1000m近くある急登だが、根気よく登り続ける。稜線近くなると右手に祖母山頂、左手に天狗岩から、古祖母、そして傾山への縦走稜線が続く。そして背後の山並みはるか向こうに、昨日苦戦して登った大崩山が、その特徴ある小積みダキを抱えてチョコンと見えていた。そこに、昨日の自分の歩く姿が映し出されていた。

しっかりと踏み跡が付いた山道を祖母山頂に向かう。途中、シャクナゲが見事に満開。山頂では、あとから登ってきた地元の人と昼食をともにしながら話が弾む。下山は宮の原コースをとる。尾平から見たら、左の黒金尾根を登り、右の宮の原尾根を下山した形だ。どちらも急登だがよく似た尾根だ。1時半に下山後、着替えて竹田の温泉「花水月」で汗を流し、道の駅で夕食を仕入れてから明日の登山口、九重の牧ノ戸峠に向かう。峠近くの森の中でこの日も車中泊。

#### 5月22日(日):

4時半起床。牧ノ戸の、幅3mはある立派すぎる登山道から登り始める。標高1300mの牧ノ戸登山口から、百名山である九重山に最も簡単に登れるこのコースはたぶん九州一の人気コースだろう。ミヤマキリシマの低木が続く緩やかな登り道を進む。樹林に阻まれないので、いつも周りの山並みが見えていて気持ちがいい。それにしてもよく「九重」と名付けたものだ。この山群の山の多さは格別だ。九重ではきかないくらいだ。それら重なるの向こうに、昨日登った祖母山がモヤに包まれて見えている。朝陽が正面から登ってきた。まぶしい。星生山の麓を過ぎると、正面に久住山が見えてきた。それを下ると久住別れに差しかかり、右にとり久住山頂へ。山頂は風がきつく寒い。カップを取り出してはおる。次に九重山群の最高峰、また九州最高峰の中岳に向かう。久住山よりたった4m高いだけの1791m。中岳からは、御池の向こうに久住山が見え、好撮影サイトだ(添付写真参照)。中岳山頂に着いて一息入っていると、ヘルメット姿の同年輩が登って来られた。「今年は、ミヤマキリシマがきれいに花

芽を付けていますよ」と話しかけてこられた。話を聞くにつれ、彼が「九重の主」のような人だとわかる。この山群にきわめて詳しい。よく登るので、万一の落石に備えわざわざヘルメット装備なのだろう。彼によると、5月連休時にアケボノツツジが満開を迎え、それが終わるとシャクナゲ、その後今つぼみのミヤマキリシマが6月上旬に満開を迎えるそうだ。その頃は、日本中から登山客が押し寄せ、とくに平治岳が一番の見どころで、登山道が渋滞して歩けないそうだ。そして彼の質問「どこから来られたのか？」への応えとして、一昨日は大崩山に登ったこと、それが予想外に大変な（秘境的な）山だったことを話した。すると「大崩山に登ってみて、九州一の山と思いませんか？」と尋ねられた。「う～ん、やはり、低木山群ゆえに展望のきくこの九重のほうが好きかな…」と答えると、たみかけのように「宮崎の人ば、（大崩山山中の）リボンや標識をわざと取りよるとですよ」と言われた。要するに、私が標識やリボン（目印）が無くて困った、何度も道迷いをした。だから秘境めいていた、と言う発言に対し、宮崎の人たちは、大崩山をわざと秘境めかすために、そんなこともしていると言うのだ。ほんとうかどうかはともかく、いかにも、大崩山に対抗心を燃やす、九重の主らしい発言だった。「牧ノ戸に戻る手前あたりは、ミヤマキリシマが咲き誇っている所もあるので、写真を撮っていかれたらいいですよ」とのアドバイスをもらい、彼と別れた。軽快な足取りで来た道を牧ノ戸へ戻り、セカセカと帰路に就いた。

さて、大崩山が日本百名山に値するかどうかという判断だが、登ったもののそれはなんとも言い難い。山それぞれに特徴があり、その評価は人それぞれだ。結局、どの山が良いなんて「好き好きで、その人の好み」なのだ。そういう意味で、深田久弥という個人が選定した日本百名山を基準に評価を計ること自体に無理があるのだろう。夜帰宅して、荷物を一通り整理した後、待っていた女房殿とワインを飲みながらしばし山話に花が咲いた。今回も無事に帰れて、山の神に感謝。そして今回の山旅で出会った親切な人々に乾杯！

### 北アルプス

白馬岳：かつての勤務先の先輩二人との今年の定例山行は、白馬岳。昨冬の降雪が少なかったのか、今年の夏が暑すぎたのか、白馬大雪渓が雪氷が薄くなり滑落の危険性があるとのことで9月1日から通行禁止になったため、北の蓮華温泉から登って白馬山荘に泊まる。台風直後でこの日の山はいくぶんモヤっていたが、翌朝は素晴らしい快晴。白馬山頂からは、東には朝陽に照らされた雨飾、火打、妙高、高妻、戸隠の山々があたかも大海の島々のように雲海上に浮かんでいる。西に目を向ければ、黒部溪谷を挟んで、いかつい剣岳と立山三山が並び、南方には、手前から杓子、双耳山頂が印象的な鹿島槍、ツンととがった針ノ木、そしてその向こうに鳥が羽を広げたような前穂高、奥穂高、槍ヶ岳の稜線、その右に北アルプス最南下の名山、笠ヶ岳がちょこんと顔をのぞかせる。要するに北アルプスの北端から南の端までがズド～ンを見渡せる。これだから、しんどい目をして登ってきた甲斐があるというもの。同行のお二人も大喜び。復路は、白馬大池までは来た道をたどり、その後は樽池に降り、その夜は八方



「ダキ」と呼ばれる岩峰群が特徴の大崩山。ハシゴとクサリの連続で、滑落者が出るのも納得



一方、なだらかな九重。中岳山頂から御池（中央）を挟んで久住山（左）を望む



三国境から見上げる、快晴の白馬岳。手を振っているのが元同僚のお二人



静かな八方池に映る北アルプス最北、白馬三山～天狗の頭までの稜線。



五龍山荘前から見上げる、いかつい男性的な五竜岳。左はテント場



五竜岳山頂直下の岩場にへばり付く茜ちゃん。こんな話、聞いてないよ～

のホテル五龍館で打ち上げ、美味しい料理とお酒を堪能した。

五竜岳：わが家の紅一点・茜ちゃんは、幼いころよく配達について来ていたので、古い会員さんからは「茜ちゃんどうされてますか？」と聞かれます。彼女は今、東京で病児保育の仕事をしながら、休暇となるとスキューバダイビングや旅行やで国内外を走りまわったりします。その茜ちゃんが昨年来「山に登りたい」と言い始めました。3年前、次男・のぶすけ君が「山に登りたい」と言ってきたときは、彼は完ぺきに足を作ってきたので、思い切って北アルプスのハイライトである奥穂高岳～大キレット～槍ヶ岳を縦走しました。しかし茜ちゃんの脚力は未知数。「山は、友だちと高尾山（八王子）に登ったくらい。高い山でなくてもいいから、山に登るという実感を知りたい」とのこと。最初は、ハヶ岳か蓼科山くらいが妥当かな、と思ったが、どうせ行くなら北アルプス主稜線の絶景を見せたい、と悪いクセがムクムクと顔をもち上げたのでした。ともかく彼女の脚力を確かめねば、と彼女がお盆に帰省した折に志方の高御位（300m）3ピストン（往復）に出向きました。「僕たちも登る・・・」と、同居する孫のこうき君（6歳、去年すでに高御位完登）とゆりちゃん（4歳）、そしてお母さん（長男嫁）も同行。1回目はみんなでワイワイ楽しく登った後、三人は帰宅。2回目は、茜ちゃんに全速力のスピードで登ってもらおう。そして3回目はマイペースで。その結果、そう息も上がらないし、足のふらつきもない。なので、東京に帰ったら高尾山（600m）を2ピストンして、もう少し足を作ることを条件に、五竜岳（2814m）に登ることにする。ここは往復（八方と遠見尾根）にリフトが使える、比較的簡単に後立山の稜線に立つことができる中級者向きのコース。9月23日、松本駅大糸線ホームで茜ちゃんと合流、その夜はホテル白馬で地ワイン（五ーワイン）で前祝い。翌朝一番のリフトで八方尾根に取り付く。右には白馬三山、左には五竜、鹿島槍が堂々とそびえる中、高度を上げていく。八方池まで来た。無風だったので、白馬三山と天狗の頭までの稜線がきれいに湖面に映っている。観光写真などでおなじみの光景だ。「すごい、すごい…」と茜ちゃんは写真を撮りまくっている。そこからしばらく登ると、唐松頂上小屋、つまり後立山連峰の稜線に出る。景色は一変し、黒部渓谷を挟んで立山三山、剣岳、毛勝三山がド～んと西に構えておられた。北アルプス最北の山々が一望だ。小屋前にザックをデポシ（預け）、往復40分ほどの唐松岳山頂（2696m）に向かう。山頂は登山者であふれ返り、空前の登山ブームと言われているのが納得できる。唐松頂上小屋に戻って昼食をとり、稜線を五竜岳に向かう。すぐに牛首の岩場に差しかかる。ここは、左右に沢がスト～んと切れ落ちた岩場のてっぺんを、設置された鎖を頼りに横這い、縦這いで渡っていく高度感のある所。「え～、ほんとにこんな所に行くの？」と茜ちゃん。「大丈夫、大丈夫、三点確保さえしっかりしていれば落ちないよ」と応えるも、初めての体験に彼女はへっぴり腰で岩にへばり付いてしまっている。幸い、前に行く5人パーティが遅々として前に進まなかったため、こちらも時間をかけてこの難所を渡り終えた。すると茜ちゃん、「あのねお父さん、来る前に『落ちて死ぬような場所はないでしょうね？』と何回か尋ねたよね、そしたら『そんなア

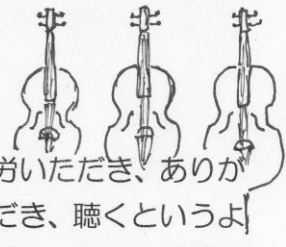
ブない所はぜ〜んぜん無い。ぜ〜んぶスタコラ歩けるふつうの山道や』と言ったよね。でもこれって、落ちたら死ぬでしょ！もうッ！」。アワアワアワのアワジシマ。ヤバイ。7年前、白馬から針ノ木までを縦走した時、不帰や八峰のキレットはちょっとした歯ごたえがあったかもしれないが、この牛首や五竜山頂手前の鎖場など記憶にも残っていなかったのだ。「これくらいでビビってたら、山なんか登れるか・・・」と茜ちゃんに聞こえない小声で一人うそぶく。この親のもとに生まれて32年、この子いまだ父親のゴジャぶり、アホぶりを知らず・・・。

平坦な下りになると、三羽のライチョウさんが「ごくろうさま」と言わんばかりに迎えてくれた。胸下の羽根が白く変わりつつあるのが、冬の到来を感じさせた。ここから白岳に登り返して五龍山荘着。山小屋は当然満員、そして夕食は定番のカレーライス。この混雑にもかかわらず茜ちゃんは8時から爆睡した、と言うから女は強し！翌朝は小屋の前でご来光を楽しみ、朝食後、五竜山頂（2814m）に向かう。山頂は少しガスっていたが、切れ間に鹿島槍や剣、立山が顔を出してくれた。下山にかかり、茜ちゃんは、「鎖場の高度感にも慣れてきた」と喜んでいる間もなく、昔バレーボールで痛めた足首が少し腫れはじめ、それをかばって歩いているうちにヒザをひねってしまった。彼女は、ここから足を引きずって歩くことになる。「山は下りで足を痛める」という言葉通りだ。この状態で、5時間余りの急坂な遠見尾根の下りはきつい。「ヘリを呼ぶことになったらコトなので、お父さんがザックを持つ」と何度か声をかけるが「いや、大丈夫」と言う。急ぎよ、その辺の枯れ枝でストックを作ってやるが、ストックの使い方に慣れていないのでそれらも役に立たなかった。しかし、なんとか痛みをごまかし、ごまかして降り切った。ご苦労さま!!!

ふもとの温泉で汗を流し、「白馬道の駅」に向かう。ここのレストランは地元の食材を使ったメニューが豊富だ。それらを肴に生ビールでカンパ〜イ。おいちい！「山の上の景色はすごかったね。下から見るとぜんぜん違う。写真500枚は撮った」と茜ちゃん。「よかった、よかった。次はぜひ穂高に登ろう！できればテント泊で」と私。かくして、父娘珍道中の幕が閉じたのでした。



### コンサート来場のお礼



10月16日は、わざわざウエルネスパークまでご足労いただき、ありがとうございました。50名近い会員さんにご来場いただき、聴くというより応援に駆けつけていただいた気持ちで一所懸命弾きました。河合師匠も喜んでおられました。当日の演奏を、甲田さんがVTRに収め、YouTubeに載せてくれていますので、インターネット、スマホが利用できる方は「河合音楽村加古川ウエルネスパーク」で入力・検索ください。

